

雪渡り

宮沢賢治

青空文庫

雪渡り その一（小狐こぎつねの紺三郎）

雪がすっかり凍って大理石よりも堅くなり、空も冷たい滑らかな青い石の板で出来てゐるらしいのです。

「堅雪かんこ、しみ雪しんこ。」

お日様がまつ白に燃えて百合ゆりの匂におひを撒まきちらし又雪をきらきら照らしました。木なんかみんなザラメを掛けたやうに霜でぴかぴかしてゐます。

「堅雪かんこ、凍しみ雪しんこ。」

四郎とかん子とは小さな雪ゆきぐつ沓くつをはいてキツクキツクキツク、野原に出ました。

こんな面白い日が、またとあるでせうか。いつもは歩けない黍きびの畑の中なかでも、すすきで一杯いっぱいだった野原の上うへでも、すきな方かたへどこ迄までも行けるのです。平らなことはまるで一枚の板いたです。そしてそれが沢山の小さな小さな鏡かがみのやうにキラキラキラキラ光るのです。

「堅雪かんこ、凍しみ雪しんこ。」

二人は森の近くまで来ました。大きな柏かしはの木は枝えだも埋うづまるくらゐ立派りっぱな透とおきとほった氷つ

柱からだを下げ、重さうに身体からだを曲げて居をりました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。狐きつねの子あ、嫁よめいほしい、ほしい。」と二人は森へ向いて高く叫びました。

しばらくいんとしましたので二人はも一度叫ばうとして息をのみこんだとき森の中か
ら

「凍み雪しんしん、堅雪かんかん。」と云いひながら、キシリキシリ雪をふんで白い狐の子が出て来ました。

四郎は少しぎよつとしてかん子をうしろにかばって、しっかり足をふんばって叫びました。

「狐きつねこんこん白狐、お嫁ほしけりや、とつてやるよ。」

すると狐がまだまるで小さいくせに銀の針のやうなおひげをピンと一つひねって云ひました。

「四郎はしんこ、かん子はんこ、おらはお嫁はいらぬよ。」

四郎が笑つて云ひました。

「狐きつねこんこん、狐の子、お嫁がいらぬきや餅もちやろか。」

すると狐の子も頭を二つ三つ振って面白さうに云ひました。

「四郎はしんこ、かん子はかんこ、黍きびの団子をおれやろか。」

かん子もあんまり面白いので四郎のうしろにかくれたまゝそつと歌ひました。

「狐こんこん狐の子、狐の団子は兎うさぎのくそ。」

すると小狐紺三郎が笑つて云ひました。

「いゝえ、決してそんなことはありません。あなた方のやうな立派なお方が兎うさぎの茶色の団子なんか召しあがるもんですか。私らは全体いまままで人をだますなんてあんまりむじつの罪をきせられてゐたのです。」

四郎がおどろいて尋ねました。

「そいぢやきつねが人をだますなんて偽うそかしら。」

紺三郎が熱心に云ひました。

「偽ですとも。けだし最もひどい偽です。だまされたといふ人は大抵お酒に酔つたり、臆病でくるくるしたりした人です。面白いですよ。甚兵衛しんべゑさんがこの前、月夜の晩私たちのお家うちの前に坐つて一晩じやうるりをやりましたよ。私らはみんな出て見たのです。」

四郎が叫びました。

「甚兵衛さんならじやうるりぢやないや。きっと浪花なにはぶしだぜ。」

子狐紺三郎はなるほどといふ顔をして、

「え、さうかもしれません。とにかくお団子をおあがりなさい。私のさしあげるのは、ちやんと私が畑を作つて播まいて草をとつて刈たつて叩たたいて粉にして練つてむしてお砂糖をかけたのです。いかゞですか。一皿さしあげませう。」
と云ひました。

と四郎が笑つて、

「紺三郎さん、僕は丁度いまね、お餅もちをたべて来たんだからおなかが減らないんだよ。この次におよばれしようか。」

子狐の紺三郎が嬉うれしがつてみじかい腕をばたばたして云ひました。

「さうですか。そんなら今度幻燈会げんとうかいのときさしあげませう。幻燈会にはきつといらつしやい。この次の雪の凍つた月夜の晩です。八時からはじめますから、入場券をあげて置きませう。何枚あげませうか。」

「そんなら五枚お呉くれ。」と四郎が云ひました。

「五枚ですか。あなた方が二枚にあとの三枚はどなたですか。」と紺三郎が云ひました。

「兄さんたちだ。」と四郎が答へますと、

「兄さんたちは十一歳以下ですか。」と紺三郎が又尋ねました。

「いや小兄ちひにいさんは四年生だからね、八つの四つで十二歳。」と四郎が云ひました。

すると紺三郎は尤もつともらしく又おひげを一つひねって云ひました。

「それでは残念ですが兄さんたちはお断わりです。あなた方だけいらつしやい。特別席をとつて置きますから、面白いんですよ。幻燈は第一が『お酒をのむべからず。』これはあなたの村の太右衛門たゑもんさんと、清作さんがお酒をのんでたうとう目がくらんで野原にあるへんてこなおまんぢゅうや、おそばを喰べようとした所です。私も写真の中にうつつてゐます。第二が『わなに注意せよ。』これは私共のこん兵衛べゑが野原でわなにかかったのを画かいたのです。絵です。写真ではありません。第三が『火を軽べつすべからず。』これは私共のこん助があなたのお家うちへ行つて尻尾しっぽを焼いた景色です。ぜひおいで下さい。」

二人は悦よろこんでうなづきました。

狐をは可笑かしさうに口を曲げて、キツクキツクトントンキツクキツクトントンと足ぶみをはじめてしつぽと頭を振つてしばらく考へてゐましたがやっと思ひついたらしく、両手を振つて調子をとりながら歌ひはじめました。

「凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のまんぢゆうはポツポツポ。

酔つてひよろひよろたゑもん太右衛門が、

去年、三十八、たべた。

凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のおそばはホツホツポ。

酔つてひよろひよろ清作が、

去年十三ばいたべた。」

四郎もかの子もすつかり釣り込まれてもう狐と一緒に踊つてゐます。

キツク、キツク、トントントン。キツク、キツク、トントントン。キツク、キツク、キツク、キツク、キツク、キツク、トントントン。

四郎が歌ひました。

「狐きつねこんこん狐の子、去年狐のこん兵衛べゑが、ひだりの足をわなに入れ、こんこんばたばたこんこんこん。」

かの子が歌ひました。

もう一遍叫んでみませうか。」

そこで三人は又叫びました。

「堅雪かんに、凍^しみ雪しんこ、しかの子あ嫁^{よめい}ほしい、ほしい。」

すると今度はずうつと遠くで風の音か笛の声か、又は鹿の子の歌かこんなやうに聞えま
した。

「北風びいびい、かんにかんに」

西風どうどう、どっこどっこ。」

狐が又ひげをひねって云ひました。

「雪が柔らかになるといけませんからもうお帰りなさい。今度月夜に雪が凍ったらきつと
おいで下さい。さっきの幻燈をやりますから。」

そこで四郎とかん子とは

「堅雪かんに、凍^しみ雪しんこ。」と歌ひながら銀の雪を渡っておうちへ帰りました。

「堅雪かんに、凍^しみ雪しんこ。」

雪渡り その二（狐小学校の幻燈会）

青白い大きな十五夜のお月様がしづかに氷の上^{ひかみ}から登りました。

雪はチカチカ青く光り、そして今日も寒^{かん}水^{すゐ}石^{せき}のやうに堅く凍りました。

四郎は狐の紺三郎との約束を思ひ出して妹のかん子にそつと云ひました。

「今夜狐の幻燈会なんだね。行かうか。」

するとかん子は、

「行きませう。行きませう。狐こんこん狐の子、こんこん狐の紺三郎。」とはねあがつて高く叫んでしまひました。

すると二番目の兄さんの二郎が

「お前たちは狐のそこへ遊びに行くのかい。僕も行きたいな。」と云ひました。

四郎は困つてしまつて肩をすくめて云ひました。

「大兄^{おほにい}さん。だつて、狐の幻燈会は十一歳までですよ、入場券に書いてあるんだもの。」

二郎が云ひました。

「どれ、ちよつとお見せ、ははあ、学校生徒の父兄にあらずして十二歳以上の来賓は入場をお断わり申し候^{そつ}、狐なんて仲々うまくやつてるね。僕はいけないんだね。仕方ないや。」

お前たち行くんならお餅もちを持って行っておやりよ。そら、この鏡餅がいゝだらう。」

四郎とかん子はそこで小さな雪ゆきくっ沓くつをはいてお餅をかついで外に出ました。

兄弟の一郎二郎三郎は戸口に並んで立つて、

「行つておいで。大人の狐にあつたら急いで目をつぶるんだよ。そら僕らはやく囃はやしてやらうか。堅雪かんこ、凍しみ雪しんこ、狐の子あ嫁いほしいほしい。」と叫びました。

お月様は空に高く登り森は青白いけむりに包まれてゐます。二人はもうその森の入口に
来ました。

すると胸にどんぐりのきしやうをつけた白い小さな狐の子が立つて居て云ひました。

「今晚は。お早うございます。入場券はお持ちですか。」

「持つてゐます。」二人はそれを出しました。

「さあ、どうぞあちらへ。」狐の子が尤もつともらしくからだを曲げて眼をパチパチしながら林の奥を手で教へました。

林の中には月の光が青い棒を何本も斜めに投げ込んだやうに射さして居をりました。その中のあき地に二人は来ました。

見るともう狐の学校生徒が沢山集つて栗くりの皮をぶつつけ合ったりすまふをとったり殊に

をかしいのは小さな小さな鼠位の狐の子が大きな子供の狐の肩車に乗ってお星様を取らうとしてゐるのです。

みんなの前の木の枝に白い一枚の敷布がさがつてゐました。

不意にうしろで

「今晚は、よくおいででした。先日は失礼いたしました。」といふ声がしますので四郎と
かん子とはびつくりして振り向いて見ると紺三郎です。

紺三郎なんかまるで立派な燕尾服を着て水仙の花を胸につけてまっ白なはんけちで
しきりにその尖ったお口を拭いてゐるのです。

四郎は一寸お辞儀をして云ひました。

「この間は失敬。それから今晚はありがたう。このお餅をみなさんであがつて下さい。」
狐の学校生徒はみんなこつちを見てゐます。

紺三郎は胸を一杯に張つてすまして餅を受けとりました。

「これはどうもおみやげを戴いて済みません。どうかごゆるりとなすつて下さい。もうす
ぐ幻燈もはじまります。私は一寸失礼いたします。」

紺三郎はお餅を持って向ふへ行きました。

狐の学校生徒は声をそろへて叫びました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ、硬いお餅はかつたらこ、白いお餅はべつたらこ。」
幕の横に、

「寄贈、お餅沢山、人の四郎氏、人のかん子氏」と大きな札が出ました。狐の生徒は悦んで手をパチパチ叩きました。

その時ピーと笛が鳴りました。

紺三郎がエヘンエヘンとせきばらひをしながら幕の横から出て来て丁寧にお辞儀をしました。みんなはしんとなりました。

「今夜は美しい天気です。お月様はまるで真珠のお皿です。お星さまは野原の露がキラキラ固まったやうです。さて只今から幻燈会をやります。みなさんは瞬やくしやみをしないで目をまんまろに開いて見てみて下さい。

それから今夜は大切な二人のお客さまがありますからどなたも静かにしないでいけません。決してそつちの方へ栗の皮を投げたりしてはなりません。開会の辞です。」

みんな悦んでパチパチ手を叩きました。そして四郎がかん子にそつと云ひました。

「紺三郎さんはうまいんだね。」

笛がピーと鳴りました。

『お酒をのむべからず』大きな字が幕にうつりました。そしてそれが消えて写真がうつりました。一人のお酒に酔った人間のおぢいさんが何かをかしな円いものをつかんでゐる景色です。

みんなは足ぶみをして歌ひました。

キツクキツクトントンキツクキツクトントン

凍^しみ雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のまんぢゆうはぼつぼつぼ

酔^たつてひよろひよろ^た太右衛門^{もん}が

去年、三十八たべた。

キツクキツクキツクキツクトントン

写真が消えました。四郎はそつとかん子に云ひました。

「あの歌は紺三郎さんのだよ。」

別に写真がうつりました。一人のお酒に酔った若い者がほほの木の葉でこしらへた^わお椀^んのやうなものに顔をつつ込んで何か喰べてゐます。紺三郎が白い袴^{はかま}をはいて向ふで見えてゐ

るけしきです。

みんなは足踏みをして歌ひました。

キックキックトントン、キックキック、トントン、

凍^しみ雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のおそばはぽっぽっぽ、

酔^しってひよろひよろ清作が

去年十三ばい喰べた。

キック、キック、キック、キック、トン、トン、トン。

写真が消えて一寸^{ちよつと}やすみになりました。

可愛らしい狐^{きつね}の女の子が黍^{きび}団子^{だんご}をのせたお皿を二つ持って来ました。

四郎はすっかり弱ってしまひました。なぜってたった今^た太右衛門^{ゑもん}と清作との悪いものを知らないで喰べたのを見てゐるのですから。

それに狐の学校生徒がみんなこつちを向いて「食ふだらうか。ね。食ふだらうか。」なんてひそひそ話し合つてゐるのです。かん子ははづかしくてお皿を手に持ったまゝ、まっ赤になつてしまひました。すると四郎が決心して云ひました。

「ね、喰べよう。お喰べよ。僕は紺三郎さんが僕らを欺だますなんて思はないよ。」そして二人は黍団子をみんな喰べました。そのおいしいことは頬ほつぺたも落ちさうです。狐の学校生徒はもうあんまり悦よろこんでみんな踊りあがつてしまひました。

キツクキツクトントン、キツクキツクトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり、

たとへからだを、さかれても

狐の生徒はうそ云ふな。」

キツク、キツクトントン、キツクキツクトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり

たとへこゞえて倒れても

狐の生徒はぬすまない。」

キツクキツクトントン、キツクキツクトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり

たとへからだがちぎれても

狐の生徒はそねまない。」

キツクキツクトントン、キツクキツクトントン。

四郎もかん子もあんまり嬉しくて涙がこぼれました。

笛がピーとなりました。

『わなを軽べつすべからず』と大きな字がうつりそれが消えて絵がうつりました。狐のこん兵衛がわなに左足をとられた景色です。

「狐きつねこんこん狐の子、去年狐のこん兵衛べゑが

左の足をわなに入れ、こんこんばたばた

こんこんこん。」

とみんなが歌ひました。

四郎がそつとかん子に云ひました。

「僕の作つた歌だねい。」

絵が消えて『火を軽べつすべからず』といふ字があらはれました。それも消えて絵がう

つりました。狐のこん助が焼いたお魚を取らうとしてしつぽに火がついた所です。

狐の生徒がみな叫びました。

「狐こんこん狐の子。去年狐のこん助が

焼いた魚を取るとしておしりに火がつき

きやんきやんきやん。」

笛がピーと鳴り幕は明るくなつて紺三郎が又出て来て云ひました。

「みなさん。今晚の幻燈はこれでおしまひです。今夜みなさんは深く心に留めなければならぬことがあります。それは狐のこしらへたものを賢いすこしも酔はない人間のお子さんが喰べて下すつたといふ事です。そこでみなさんはこれからも、大人になつてもうそをつかず人をそねまず私共狐の今迄いままでの悪い評判をすっかり無くしてしまふだらうと思ひます。閉会の辞です。」

狐の生徒はみんな感動して両手をあげたりワーツと立ちあがりました。そしてキラキラ涙をこぼしたのです。

紺三郎が二人の前に来て、丁寧におじぎをして云ひました。

「それでは。さやうなら。今夜のご恩は決して忘れません。」

二人もおじぎをしてうちの方へ帰りました。狐の生徒たちが追ひかけて来て二人のふところやかくしにどんぐりだの栗だの青びかりの石だのを入れて、

「そら、あげますよ。」「そら、取って下さい。」なんて云って風のように逃げ帰って行きます。

紺三郎は笑って見てゐました。

二人は森を出て野原に行きました。

その青白い雪の野原のまん中で三人の黒い影が向ふから来るのを見ました。それは迎ひに来た兄さん達でした。

青空文庫情報

底本：「宮沢賢治全集⁸」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年1月28日第1刷発行

2004（平成16）年4月25日第20刷発行

初出：「愛国婦人」

1921（大正10）年12月号、1922（大正11）年1月号

入力：土屋隆

校正：鈴木厚司

2009年1月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪渡り

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>